
冷え性

黒死蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷え性

【Nコード】

N0554I

【作者名】

黒死蝶

【あらすじ】

冷え性に悩んでいる神楽に話しかける沖田。青春恋物語。

「はぁ・・・」

小さくため息をしてマフラーに顔をうずめた。
なんで冷え症に生まれてしまったのだろう・・・。

すっかり季節は冬一色となってしまうた。
手袋とマフラーを身につけ街を歩く。

「あーもう、寒いアルー!!!」

もうヤケクソになって叫んでみた。

当然、温かくなるわけでもなく虚しさが心に広がっただけだった。

「なにやってんでい、急に叫んで」

後ろから急に声が聞こえたことにおどろいて振り返った。

そこに立っていたのは、真撰組一番隊隊長であり、切り込み隊長でもある男だった。

まさか、話かけられるとは思わず呆然と男を見つめていた。

「フツ・・・なんて顔してんですかい」

笑われたことに恥ずかしさがこみあげて、つい顔をそらしたしまった。

「・・・うるさいアル」

「冗談でさあ」

そういつてわたしの隣に並んだ男。

隣にこられたことが恥ずかしかったので、少しうつむいて歩いた。

「チャイナ？どうしたんですかい？」

少しかがんで覗き込んできた男にもう心臓がはちきれそつだ。

「ちつ近いアル！！な、なんでもないヨ！！」

「ふーん」

面白そうにこつちをみてくる男。

さつきからどきどきするさい心臓。

もう、なんなのだろう・・・。

「チャイナ、それ完全防備だな」

男が指をさしたのは、わたしの防寒グッズ。

「・・・ちよと冷え性ネ・・・」

ちよつと意外と言って、ガムを食べ始めた男。

器用にガムをふくらます姿をみつめていたら、なんだよって言って笑いかけてきた。

「あー、寒くなつてきやがった・・・。

・・・神楽・・・」

「な、なにアルか！？」

初めて名前を呼ばれて、心拍数が限界だった。

「手袋・・・片方貸してくれませんか？」

こうなったらもう貸さないといけない状況だ。

「いいアルヨ・・・はい」

そういつて右の手袋をかした。

「左がいい・・・」

「なんでアルか？」

そういうと、男のほおが赤く染まった。

「神楽の片手、寒くなるだろい・・・？」

だから・・・ほら」

そつと差し出された手の意味が分からず戸惑った。

「・・・手エつないでやるっていつてんでい、気づけよ鈍感娘」

「な!!!・・・もうなにいつてるネ!!!」

少しうつむいていると、左の手袋が彼の手によってとられ、わたしの左手が冷たい風にさらされる。

それを壊れ物をあつかうように優しく包み込む彼。

「サド・・・？」

ぱつと彼を見ると、ぷいっつと顔をそむけられ、そしてつぶやかれた。

「・・・好きでさあ・・・」

ぎゅっと右手に力をいれる彼。

それに答えるように握り返した。

「・・・神楽？」

「・・・アル」

「なんいいったんですかい？」

好きアルと言ったつもりだが、きこえなかったようだった。

「好きアル!!」

安心したように笑う彼に、わたしも安心して笑いかけた。

「・・・冷え性、捨てたモンじゃないアル」

「・・・そうですねい」

二人は、その日もう一度恋に落ちた。

(後書き)

沖田のしゃべり方変でごめんなさい!!
感想があったらぜひ送ってください!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0554i/>

冷え性

2010年10月28日03時43分発行